

社会部門

教育現場に臨む臨床社会心理学

宮 本 正 一

(岐阜大学教育学部)

1. はじめに

本稿では、わが国の最近1年間(2000/6-2001/7)における教育心理学、特に「社会」に関連する研究動向と展望を行う。実際には「教育心理学研究」「心理学研究」「実験社会心理学研究」「社会心理学研究」,「日本教育心理学会第43回総会発表論文集」,それに各大学の紀要に掲載された論文を対象にする。筆者は学校臨床にも興味を持っているので、できるだけ臨床社会心理学に関わる研究を取り上げたい。紙幅の都合上「論文集」の研究は簡単に紹介し、引用文献には示さず、別府・宮本(PC98)の様に本文中にのみ示している。

論文は、個人内過程→個人間関係→集団・組織の順に取り上げた。これまでの「年報」でも「社会部門」で取り上げた論文が「発達」「人格」「臨床」などの部門でも取り上げられることがかなり見られた。これは各領域が密接に絡み合っていることの証であり、今年も同様であろう。

2. 個人内過程

2.1 親和動機

杉浦(2001)は中学生・高校生・大学生が特定の友達といつも行動を共にする傾向の背景にあると考えられる親和動機を拒否不安と親和傾向の2つの要素から分析している。そしてその発達の差異、性差、对人的疎外感との関係を検討している。榎本(2000)も青年期の友人関係を「感情→欲求→行動」という3つの成分の連鎖と仮定し、「感情→欲求」の関係と「欲求→行動」との関係に二分して分析している。中学生・高校生・大学生(計896名)に質問紙を実施し、連鎖関係は重回帰分析により解析されている。その結果、友人に対する信頼・安定感が欲求に関連し、親和欲求が全ての行動に関連していた。

2.2 目標志向性

黒田・桜井(2001)は抑うつ反応を規定していると考えられる友人関係場面での目標志向性の重要性を検討している。3種の目標志向性は①経験・成長目標、②評価—接近目標、③評価—回避目標である。中学生356名に対して目標志向性とCDI: Children's Depression Inventoryを

施行し、目標得点を独立変数、抑うつ得点を従属変数とする重回帰分析を行った結果、目標志向性の重要性が確認された。黒田(PC35)はこの目標志向性の安定性を1年後、あるいは1年半後に再検査している。その相関は.67から.57の大きさであった。目標志向性という概念は従来の動機や欲求とどう異なるのであろうか。

2.3 自己認知・他者認知

外山・桜井(2000)は正確な自己認知が精神的健康につながるのではなく、自分を自分の都合良いように認知する、傾いた認知こそが精神的健康に必要であるとするpositive illusionの仮説を検討している。自己を「平均的な」大学生・専門学校生よりも好意的に認知している者は抑うつ得点が低かった。

金木・塚野(2001)は不登校児15名と登校児62名に、「赤ちゃん」「今」「大人」のそれぞれの時期に自分がなりたいかを質問した。不登校児は「赤ちゃん」になりたい者が多く、「大人」を拒否する傾向もあり、将来への展望が乏しかった。

中山・古橋(2000)は不登校状態の中学生10名の自己受容について聞き取り調査と質問紙により検討している。彼らは周囲のまなざしを気にし、不登校している自分を「悪い」と感じ、自己受容が低いことを明らかにしている。阿部(PB51)は不登校生徒と学校に通学している中学生のself esteem、理想自己と現実自己の差異を比較検討している。

自己を見つめさせることは教育的意義がある。才田・春口(2000)はロール・レタリング(役割交換書簡法)を中学校で実践し、生と死を見つめる指導を全16時間にわたって行った。その結果、エゴグラムのAの値が上昇し、生徒の現実検討能力を向上させることができた。

西村・浦・長谷川(2000)は、日常生活で出くわす出来事の特質により我々の自己評価過程がどのように異なるかを自己査定動機と自己高揚動機との観点から検討している。課題遂行に関連して体験した出来事の後では自己査定動機が活性化され、社会情動的な出来事の後では自己高揚動機が高まるであろうとの仮説はほぼ検証されている。課題関連場面では自己査定動機から自己高揚動機

へと入れ替わっていくが、社会情緒場面では自己高揚動機が持続することが明らかにされた。洗練された分析的研究である。

南・今田 (2000) も小学生の自己認知と級友認知の関連について、社会的比較および positive illusion の観点から検討している。自分自身と「あなたのクラスのお友達」に対する印象を個人的親しみやすさ・社会的望ましさ・力本性の観点から評定させている。因子分析の結果、級友認知は自己認知ほど精緻化されていなかった。また自己と級友の特性評価が反映過程に近い様相を示していた。

明田ら (2001) は児童の仲間関係における意図帰属と対人行動を Dodge の社会的情報処理モデルから検討するために3つの調査をしている。マンガによる場面想定法を用いて小学生の意図帰属を測定した結果、研究 I, II とも、女子はより好意的な意図帰属をしていた。また学年の進行とともに非好意的帰属が増加していった。研究 III では、「落ち着いて反論や抗議をする」と担任教師から評定された児童ほど仲間の意図を好意的に解釈する傾向が認められた。久木山 (2000) は Dodge の社会的情報処理モデルを大学生の仲間入り場面にあてはめ検討している。パス解析の結果は、それぞれのステップが連鎖的に影響し合うのではなく、各々のステップが独立に影響する可能性を示唆している。

佐々木 (2000) は幼児の返報行動における社会的情報処理を2つの実験により検討している。他者の意図が曖昧な好意的行動を認知する際に攻撃性の高い子どもは好意的には認知しない、持ち物に対する喪失感が大きい場合にはどの個人特性においても返報行動を減少させる、等のことを明らかにしている。

小嶋 (2001) は5, 6歳児の幼児が対人場面におかれた他者の嫌悪を推測することができるかどうかを検討している。刺激場面は「月子ちゃんが花子ちゃんをたたいた」のような6つの場面であり、絵と朗読をVTRに録画したものを提示した。その結果、5, 6歳児でも嫌悪場面で花子ちゃんの嫌悪の感情 (いやだ) と怒りの感情 (怒っている) を状況から推測できることを示している。小嶋 (2000) は幼児による他者のネガティブ情緒の推測とネガティブ情緒への対処に関する文献的検討を行っている。

吉村 (2000) は49名の幼児に3種の対人葛藤場面を提示し、他者行動の原因帰属と葛藤解決法について実験している。他者行動を「意地悪」と誤って認知した男子は相手を攻撃し、また「やめて」と対人志向的に反応することが示された。丸山 (PC17) は日頃から対人葛藤を引き起こすことの多い幼児と少ない幼児と担任が判定した2群の社会的認知の特徴を比較している。

磯崎 (2001) は児童の実際の学業成績における自己評価

維持と学級適応について報告している。小学生に一番一緒にいたいクラスメート名を尋ねると、一番負けたくない教科では自分の成績の方が高いが、「負けても気にならない」教科ではクラスメートの方が高成績であった。また自尊心の高い児童は自己優位の、自尊心の低い児童は友人優位の認知傾向を示した。外山 (PA20) は、幼稚園年長児と小学生を被験者に、社会的比較行動の発達を検討している。

平井 (2000) は自己と他者の要求が葛藤する3種類の他者と3水準の問題深刻度、計9種類のジレンマ課題を作成した。それを大学生63名に提示して考えさせ、その思考の内容を声に出させ録音した。家族とのジレンマにおいては自己を優先させ、友人およびその他の集団との葛藤においては相手を優先させることが分かった。問題が深刻になるにつれて自己を優先させるという結果を得ている。

藤村・河村 (PA56) は教師の児童認知を問題にしている。福崎・上地 (PC96) は、攻撃性の高い生徒に対する中学校教師の認知と対処行動を研究している。伊尻 (PB76) は36名の教師の RCRT を集約している。

櫻庭ら (2001) は現代女子青年の性的逸脱行動である「援助交際」の背景要因を調査している。対象の女子高校生600名は援助交際に対する態度から経験群 (5%), 弱抵抗群 (32%), 強抵抗群 (63%) に群分けされ、9つの指標 (親への肯定的感情・学校適応・性意識・友人同調・賞賛獲得欲求・流行同調・金銭至上主義・ぬくもり希求・関心の狭さ) が示す背景要因を分散分析等により検討している。

山崎ら (2000) は日本で学ぶアジア出身日本語学校生 (n=399) の対日態度、対異文化態度を質問紙調査している。その結果、①日本人に自分が受容されているという認知は肯定的な対日態度、対異文化態度の形成に大きな役割を果たしている、②中国出身の学生は韓国出身の学生よりもより親和的な日本人イメージを持っている、③日本語学校生は留学生よりも肯定的経験が少なく、否定的経験が多く日本人や異文化との交流意図が低いことが明らかになった。

3. 個人間関係

3.1 攻撃性

畠山 (2000) は幼児の攻撃行動を自然観察し、タイプに分類し、性、仲間集団内地位により違いが見られるかを検討している。4種の攻撃行動が区別され、男児に直接的攻撃、女児に間接的攻撃が多く観察された。集団内の高地位の女児は総攻撃数が多く、仲間はずれなどの関連的攻撃が多かった。攻撃性は社会心理学から研究が多く行われているが、安立 (2001) は心理療法の立場から攻撃

性を定義し、モデル化を行っている。新たに作成した質問紙は対象攻撃行動、積極的行動、自責感、自己破壊行動、猜疑心の5因子から構成されていた。これらの攻撃性は他者との距離のとり方という観点から分析が深められ、調査研究と事例研究との橋渡しが試みられている。従来の小学生用攻撃性尺度(HAQ-C)は言語的攻撃・身体的攻撃・短気・敵意の4因子構造と考えられていたが、山崎ら(2001)の因子分析結果は前記3因子が表出性攻撃として1つにまとまり、敵意だけが非表出性攻撃として区別された。彼らは攻撃性を反応的攻撃と道具的攻撃とに2大別し、さらに前者を表出性攻撃(言語的攻撃・身体的攻撃)と非表出性攻撃(敵意)とに分けることを提案している。

湯川・三崎(PC32)はいわゆる「キレル」という問題行動の背景に「自己存在の希薄さの感覚」があると考え、質問紙を作成し、攻撃性との関係を見ている。被験者は大学生であり、「自己存在の希薄さの感覚」が強い学生は敵意得点が高く、言語的攻撃得点は低かった。黒沢・森(2001)は家庭内暴力を伴った不登校女児へのスクールカウンセリングにおいて「問題の外在化」アプローチを適用した事例を報告している。「問題の外在化」とは、例えば暴力を振うという問題行動の場合に、本人と問題行動とを分離して、「悪いものが勝手に本人の中に住んでいて暴れる」と考える。ある意味で暴力の原因を本人そのものに帰属させるのではなく、勝手に自分の中に入ってきた暴れん坊に帰属させ、本人自身と問題行動とを分けて捉えさせることである。著者らは、小学3年生のA子の不登校、および暴力を「悩み菌・暴力菌・怒り菌」として「外在化」することにより、極めて短期間に問題解決に至らせることができた。

3.2 自己開示・友人関係

丸山・今川(2001)は対人関係の悩みを他者に自己開示することがストレス低減に及ぼすことをパス解析により、大学生182名を対象に検討している。その結果、自己開示がカタルシス効果を持つこと、被開示者からのfeedbackによってもストレスが低減されることを示している。折谷(2000)は友人関係において自己開示しない、自他を傷つけないように気をを使うという防衛性を規定する要因について葛藤経験に焦点を当てて検討している。リーダー経験の豊富な人は自己開示をする人を選んでいて、社会参加経験の多い人は広く自己開示していた。大見(PA57)は中学生135名の自己開示傾向について調査している。田中・落合(PA103)は青年期にある大学生の自己開示を促進する要因として、被開示者の態度と開示者の自尊心に着目して実験を行っている。

前田・安藤(2000)は子どもの引込み思案傾向に焦点を当て、仲間関係における人気度、友人関係および孤独感との関係を検討している。友人数と人気度も孤独感と関係が深い、引込み思案傾向はさらに孤独感と密接な関係にあることが示された。畠山(2000)は青年期の友人とのつきあい方に関して、大学生20名への面接により検討している。85項目にわたる「友人関係のルール」が認められ、先行研究との対比が行われている。久米(2001)は大学生の友人への依存のあり方を自己安定性尺度との関連において調査研究している。大学生313名への質問紙から友達への依存のあり方は男女差が大きいこと、友達と居る時の自分の方が安定していることが明らかにされている。

木野・鈴木・速水(2000)は不快感情を抱いている友人に対して、その不快感情を調整するための働きかけをどうかに関わる個人的要因とその理由の検討をしている。多元的共感性尺度などの要因から働きかけを「する」群のロジスティック回帰分析を行い、有意な要因を見出している。背景には愛他的理由と利己的理由のいずれかが認められた。高木(2000)は否定的対人感情がどのように修正されるかを、専門学校生35名の追跡調査で検討している。対人的動機が接近的であるほど、相互作用が多いほど否定的対人感情が軽減される可能性が示唆された。

大田(2000)は大学生76名からライバル関係の認知の基準を抽出している。小説やスポーツなどからライバルだと思ふ理由・特徴を記述させ、数量化Ⅲ類により分析している。大学生は競争関係の質と対人感情によりライバル関係を捉えていた。

宮下(2001)は少年鑑別所に収容された103名の非行少年の疎外感を一般群と比較している。少年鑑別所群の疎外感の受容が低いこと、非行の「進度」が進むにつれて疎外感の受容がやや高くなることを明らかにしている。内田・大内(2000)は不登校生徒に対する学校現場として有効な関わりとして、「友達の援助」に注目し2つの事例から友達援助における「つながり」の重要性を指摘し、援助の時期、援助できる友達の特徴について論述している。

3.3 教師からの影響

深田ら(2000a; b)はわが国における説得研究(論文143点と専門書11点)の展望を行い、8つの研究の方向を示している。牧野(2000a; b)はユーモアが説得や心理的リアクティクスに及ぼす影響を実験により検討している。

西口(2000)は教師の側の心理的要因と児童への言葉かけとの関連を検討している。子どものどのような問題行動に教師が心を乱されるか、その問題行動を解決する自

己効力強度、その子どもと昔の自分がどれくらい似ているかを取り上げ、「けんか」などの10の問題行動場面での教師58名の言葉かけを分析している。言葉かけは14のカテゴリーに分類され検定が行われている。

坂本・内藤 (2001) は担任教師への小学生が持つ信頼感に関連する要因をパス解析により検討している。指導行動としてPM リーダーシップ論でのP的指導行動とM的指導行動、教師の自己開示を考え、仲介変数として児童から教師への信頼感、結果変数として児童のスクール・モラル、自己開示を仮定した。769名の児童を対象にした質問紙調査の結果より、教師のM的指導行動→児童から教師への信頼感→児童のスクール・モラルのパスが提起された。長沼・庄司 (PD45) は中学生と高校生に、教師からどのような影響を受けたかを検討している。

3.4 いじめ

大石・吉田 (2001) はいじめ発生の基礎と思われる黒い羊効果を社会的アイデンティティ理論の観点から実験的に検討している。看護関係の学生に「好ましい一般大学生」「好ましくない一般大学生」「好ましい看護学生」「好ましくない看護学生」を思い浮かべ、SD法により評定させた。その結果、看護学生という内集団と一般大学生という外集団を両方評定した場合にのみ、黒い羊効果が認められた。

大野・長谷川 (2000) は「いじめ」の被害者に対する外見のステレオタイプについて検討している。大学生に、彼らとは全く面識のない生徒写真を提示し、いじめの被害者を推定させた。その結果、ある特定の写真において強い一致が示された。強い一致が見られた写真の外見的特徴として一般的弱さが示された。

葛上 (2001) はいじめの実態調査を報告している。特にいじめの背景要因として学習理解度と自尊感情に焦点を当て分析を行っている。その結果、いじめは同じクラスの子とも同士の中で、主に休み時間に教室内で起こっている特徴が明らかにされた。また学校の勉強について行けない子どもがいじめられる危険性が高いことも報告されている。

岡安・高山 (2000) は中学生のいじめ被害・加害経験と心理的ストレスとの関係を検討している。6892名の中学生は無視・悪口被害群、全般的被害群、無視・悪口加害群、全般的加害群、非関与群の5グループに類型化された。全般的被害群はストレス症状が高く、無視・悪口被害群は抑うつ・不安傾向が高い。両者はまた学業に関するストレスの経験頻度が高く、それを嫌悪的と感じていた。全般的加害群は不機嫌・怒り、無気力のレベルが高く、先生との関係が良くない者が多かった。土本・中谷

(PF52) は仲間はずれに対して誰のサポートが有効であると認知しているかを小学生と中学生を対象に調査している。萱原・福永 (2001) はいじめから不登校に至った6年生の問題をとおして学級全体が成長した1年間の記録を報告している。

3.5 ストレス

後藤・田中 (2001) は女性教師のストレスの特徴を検討している。被験者は136名の女性教師であり、質問紙の因子分析の結果、職場における人間関係、家事・育児に起因する多忙さ、社会から受ける否定感が抽出された。そして年齢を経るにしたがって身体的ストレス症状が多くなり、精神的ストレス症状が減少するなどの知見を報告している。網谷 (2000) は日本における教師のメンタルストレスに関する研究を展望している。

Kilburg・西川 (2001) は英語圏の研究者からなされた日本の児童 (小3から小6までの114名) のストレスとストレス対処行動についての研究である。年長になるほどストレス度が高くなる、意地悪をされる状況では問題焦点コーピングを使う、女子はより多くの仲間関係ストレスを経験する等の結果が報告されている。

加藤 (2001) はコーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係を検討している。状況に応じて柔軟にかつ適切にコーピングを選択することが精神的健康度を高めるのではないかと考え、大学生に友人関係で生じたストレスイベントに対して普段どのように対処しているか、望んだ結果が得られなかった時どう対処しているかと2度、質問した。失敗したコーピングの使用を断念し、別のコーピングを使用すると回答した11名の大学生は他の群よりも抑うつ傾向得点が低く、精神的に健康であることが示された。

佐藤・杉原 (PA16) は中学生と高校生計113名のストレスコーピングスタイルを検討している。岡田 (PD43) は中学生がストレスに対面したときに行うコーピングは単独ではなく、複数のコーピングを組み合わせているであろうと考え調査している。

西村ら (2000) は教師からの自由記述を分析して、ストレスラーとなる児童生徒のタイプを不服従、反逆、無気力、病的傾向の4タイプに区別した。また対処方略も4つが区別され、相談方略が一番多く、関わり方の変化、体制作り、一時退却が続いていた。栗山ら (PB66) は小中学生とも無気力感を持つものは攻撃性も内在していると考え、日常生活状況との関連を検討している。藤井 (PA32) は中学生の怒り水準を客観的に測定する中学生版怒り尺度を開発しようとしている。池上・井上 (PC42) は中学生のストレス源を幅広く調査し、攻撃衝動と攻撃感情との

関係を検討している。

青山・濱口 (2001) はストレス対処方略の三次元モデルに基づいて中学生・高校生用のストレス対処方略尺度を作成し、その時間的安定性を検討している(研究I)。6ヵ月を経ても時間的安定性があると述べている。研究IIではストレス対処方略と学級適応度・ストレス反応への影響の比較検討されている。「問題に遭遇したとき、原因を見つけその解決策を探る」ストレス対処方略がかえって抑うつ・不安を高めてしまうという興味ある結果も示されている。

橋本 (2000) はストレスプロセスのパス・モデルに基づいて肯定的/否定的対人関係のストレス媒介効果を検討している。女子短大生を被験者にして、知覚された否定的ネットワークはストレスの悪影響を増幅させ、実行された否定的相互作用は単独で精神的健康に悪影響を与えていた。しかし知覚/実行サポートは直接/緩衝効果ともに見出されなかった。

平原・岡安 (PF42) は学校ストレスではなく、家庭ストレスに焦点を当てている。田中 (PA34) は怒りを抑制する者と表出する者とのストレス反応を比較している。浅田 (PE53) は高校生を対象にストレスマネジメント教育を実践し、行わなかった統制群と比較している。飯田・石隈 (PE85) も中学1年生2クラスでストレス対処の授業を行い、その効果を検証している。

3.6 ソーシャルスキル

河村 (PB11) は教師によって「非」社会的と評定された児童生徒と「反」社会的とされた児童生徒のソーシャル・スキルの特徴を分析している。濱口 (PD11) はゲスフーテストにより社会的地位の高い児童44名と低い児童37名の社会的情報処理の相違を検討している。浅川・東・古川 (2001) は社会的スキルを中学生や高校生がどのくらい重要視しているか、学校適応している者はどのくらい重要視しているかを調査している。女子のほうが男子より、中学生は高校生よりも重要度認知が高かった。

磯部・佐藤 (PB20) は仲間はずれや無視など、仲間関係を操作して相手を傷つける関係性攻撃とソーシャル・スキルとの関連を分析している。江村・岡安 (PC51) は中学校の授業でソーシャル・スキル教育を取り入れ、その効果を検討している。藤枝・石川 (PD40) と石川・藤枝 (PD41) は、ソーシャル・スキル教育の効果を高める工夫をしている。高橋 (PC54) は中学生を登校適応群、登校不適応群、不登校群に分けてソーシャル・スキル尺度、対人不安尺度、対人的自己効力感の得点を比較している。

戸田 (2001) は学校におけるピア・サポートの効用、基本的枠組、実践上の課題を考察し、鳥取県内の実践の実

態、自らが関わっている2つのピア・サポートについて紹介している。八並・細見 (2001) は教師が主導的な援助サービスを行う学校内の生徒援助システムとしてのスチューデントサポートチーム (SST: Student Support Team) の有効性を事例研究している。SSTは生徒に対しては、心理的安定感と学業成績の向上をもたらす、教師に対しては高い組織改善をもたらす効果が確認されている。

3.7 親子関係

大芦 (2001) は親子関係を測定する質問紙を用いた研究の文献展望を行っている。古典的な研究から現代の研究まで75編の論文が要約とともに紹介されている。小高 (2000) は青年の親への態度・行動についての関係尺度の作成を試み、得られた5つの因子毎に息子→父、息子→母、娘→父、娘→母という4つの関係の特徴を比較している。娘→母関係は親密であること、5つの因子は親和志向因子と客観的独立志向因子に集約されることが考察されている。

首藤 (2000) は幼稚園児の両親を対象に、家族の共感経験と家族の成長に焦点を当てている。母子間の共感体験、父子間の共感体験、妻から見た夫婦間共感、夫から見た夫婦間共感を質問している。因子分析の結果、4種の尺度はいずれも苦しみや楽しみを「共有する」因子と相手とのズレや個性の違いを意識する「分離」の因子から成っていた。夫の成長感には父子間の「共有因子」が影響していた。

大石・宇恵 (2000) は青年期における愛着の研究として成人用愛着尺度を作成しようとしている。461名の大学生に質問紙を実施し因子分析した結果、愛着は対人不安と対人回避の二次元構造を持つことを示した。さらに愛着スタイルとこれらの尺度との関係が分析されている。福田 (PB06) は食事場面での親から幼児への接食促し行動と幼児の情動状態との関係を行動観察法により検討している。

田中・中澤・中澤 (2000) は単身赴任の長期化が母親のストレスに与える影響を横断的・縦断的に検討している。父親不在の生活が終了する時期の不確実さや長期継続の予測がストレス反応を悪化させていた。母親の年齢に関しては、横断的研究では45歳以上の母親のストレス反応を強め、縦断的研究では高年齢群のストレス反応を強めていたと報告している。長瀬・角間・草野 (2000) は子どもの問題行動における親子関係の影響を、少年鑑別所に入所している子どもと一般の子どもを対象にして、その親子関係診断テストの成績を比較することにより検討している。問題行動を起こした群の子どもは、自分に対する親の態度に拒否的傾向を感じており、特に無視や無関

心といった「消極的拒否」感を感じていた。彼らの親は溺愛傾向も強く、悪いことに対しても味方になり、少しでも子どもを手放したくない傾向が強かった。また両親の養育態度が一致せず、父親は育児に参加せず、一人親の家庭も多かった。彼らの兄弟姉妹はその数が少なく、一人っ子である割合が高かった。このような家族に対する社会的支援システムを構築することが大きな課題である。西出・中村(2001)は虐待的なしつけが子どもの対人関係に与える影響について、被虐待児の対人関係尺度を開発し、親からの身体的虐待、保護怠慢や拒否経験の有無の効果、虐待により施設に収容されている子どもとの比較がなされている。施設に収容されている子どもは勿論、一般家庭でも虐待的なしつけが不信感・自己否定感・信頼感に影響を及ぼしていることが確認された。

4. 集団・組織

4.1 グループ学習

磯崎・長谷川(2000)は小グループ学習を行うことが中学2年生の数学に対する態度に与える影響を実験的に検討している。一斉授業の対照クラスでは数学のイメージ、数学観に対する項目において否定的回答が増加したが、小グループ学習を取り入れた授業後にはそのようなマイナスの効果が見られなかった。出口(2001)は効果的なグループ指導の在り方を探るために教師が行っているグループ指導の具体的内容と児童による効果性の認知との対応関係を調査している。教師に対する質問紙をクラスター分析にかけて、質問や意見表明の意義・仕方を説明・指導するクラスターと学習活動に参加・協力する活動を促進するクラスターの2つを抽出した。2種類の指導を共にに行っているクラスの子ども達は学習意欲と学力が向上し、学級全体の学力向上につながっていた。出口・中谷(2000)はグループ学習中の相互作用に及ぼす教師の介在および児童の社会的責任目標の影響を2つの実験により検討している。教師が介在すると問題行動を抑制することが示され、また向社会的目標を持つ児童は課題領域の相互作用が促進されていた。飛田(PA46)はグループ討議の経験が次に、個人の問題解決に好意的に働くことを実験により実証している。高橋・仮屋園(PB64)は小学生6年生児童による議論集団の発達の様相を事例研究している。

4.2 構成的グループ・エンカウンター

坂中・田中(2001)は小学4年生に4種類の構成的グループ・エンカウンター・エクササイズを実施し、実施しなかった統制群との比較を通してその効果を検討している。自己イメージでの変化、P-Fスタディ式の投影法、担任

教師へのインタビューにより心理的成長への効果を分析している。構成的グループ・エンカウターの好ましい効果は上記3つの観点いずれにおいても確認された。上園・西田・内野(2001)は小学5年生に3種類の構成的グループ・エンカウンターを実施した後に道徳の授業を行い、「友達」「自分」に対する連想語を分析することによりその教育的効果を実証している。曾山・本間・谷口(PC97)は、不登校を背景に持ち、適応指導教室に通う中学生6名に対して構成的グループ・エンカウンターを12回実施して、その効果を検討している。森田・富永(PC102)は中学生322名に対して、構成的グループ・エンカウンターを含む包括的ストレス・マネジメント教育プログラムを実施し、対人ストレスの低減、人間関係の促進効果を実証している。福井(PD93)は構成的グループ・エンカウターの教育的効果を高校生の対人距離の評定値変化で捉えようとしている。

集団で行う野外キャンプは構成的グループ・エンカウターのひとつとも言える。上原(PE89)は不登校児童生徒を対象にした長期キャンプの効果を報告している。強制されない日課とプログラムにより約9割の不登校が改善の方向に変化していったという。渡辺・伊藤・森田(PF37)も同様に、キャンプの持つ効果を達成動機と自尊感情の変化を探ることにより検討している。山川・宮本(2001)はキャンプに参加した不登校の子どもの親の自己受容の向上をキャンプ前後の質問紙の変化から実証している。

兩宮・井上・小谷(2001)は小学校5年生の学級集団に宇宙遊泳ゲームなどの7種のactivityを導入して集団精神療法の効果を検討している。分析は否定的感情表現が顕著であった児童の発言を取り上げ、その集団力学的意味と個人の成長としての意味を検討している。否定的感情表現に安全な空間を与えたことの意義が述べられている。吉田ら(2000)は対人関係能力を授業の中で開発するために6回の授業を中学校で行い、心理教育を実践している。記者会見ゲーム・記憶の曖昧さ・物の見え方・人の行動や出来事の見え方・原因帰属・モラルジレンマ場面についての話し合いを通して「社会志向性」と「社会コンピテンス」を教育しようと試みている。

4.3 学級崩壊

田中・淵上(PA47)は教師が子どもの学級不適応をどのような観点から捉えているかを因子分析している。また田中・淵上(PA48)は子どもの学級不適応観が全く異なる教師を抽出し、彼らの指導観・学級像・指導スタイル・モラルを比較している。加藤・大久保(PC94)は、「問題行動が多発する学校では問題行動を支持する雰囲気

存在する」ことを実証している。

長橋・今野 (PC86) は166名の小・中学校教師を対象に、「学級の荒れ」・学級崩壊の現状についての意識調査を行っている。秦 (2001) は小学生の「荒れ」に関する調査を平成8年と平成11年に子ども達と教師を対象に行い、その実態・規範意識・ストレスの推移を分析している。その結果、この7年間の間に「荒れ」はひどくなっており、教師をバカにする行為や授業妨害、非行・問題行動が増加し、規範意識が薄れてきており、子どものストレスが心身にわたって深刻な問題状況を生じさせている実態が報告されている。

浦野 (2001) は、専科「図工」の時間に荒れている小学校6年生のクラスにTT教師として入り、教師へのコンサルテーションとTTによる支援を通して教室の荒れを克服していった事例を報告している。古田 (PC50) は小学校5年生の時、学級崩壊したクラスを翌年担任し、立て直す実践を報告している。品田・河村 (PC101) も、小学校2年生の学級経営に悩む教師に対して、2週間に1度の割合で計11回のコンサルテーション面接を実施した成果を報告している。浦野・松村 (PE41) も小学校1年生の「学級がうまく機能しない状態」に対して、全教員が指導補助者となってTTによる指導体制を組んで組織的な対応をした事例を報告している。前田 (2000) は小学校6年生の担任として荒れた学級に向き合った1年間の記録を報告している。このクラスの子どもは友達とのつながりをうまくもてないという大きな課題があった。そこで学級の再構築を学級全体に働きかけるのではなく、児童一人一人への働きかけから始めたところに意義があったと考察している。

4.4 学校学級風土

山本・瀬戸 (2000) は学級での居心地の良さを規定する要因をQ-Uテストに求め、重回帰分析により検討した。その結果、友人との関係が一番影響力を持っていた。笹山 (PE45) は学校適応感に影響する学校風土の影響を数量化I類により検討している。三島・宇野・浜名 (PF49) は学級の雰囲気には及ぼす教師の影響力の源を探っている。尾崎 (PE42) は校長の勢力資源について333名の中学校教諭を対象に調査をし、勤務年数との関係を見ている。濱田・坂西 (2000) は、中学校における学校組織の特性が教師の学校諸活動および生徒の学級認知に及ぼす影響を報告している。独自の質問紙から教師は学校を「親和解放性」「取り組み」「活動・成長」の3つの因子から把握しており、三校の学校諸活動と職場雰囲気の特徴が3因子の観点から比較されている。八並・木村 (2000) では不登校生徒に対する教師側の協働的生徒指導体制を構築する

ために現職教員の大学院生が公立中学校にコンサルタントとして介入し、教職員集団10名と協働した。この1学期間の協働は、教師への質問紙調査の結果、目的的要因と組織風土的要因において有効であったことが示されている。

洲上 (2001) は教師による学校目標認知と校長の影響力浸透度との関連性について、教師53名 (第1調査) と校長29名 (第2調査) を対象に調査をしている。その結果、①校長の影響力の発揮・徹底には教師による影響力の受容が重要であること、さらに②一人一人の教師が学校教育目標を評価していてもそれだけでは十分ではなく、「教頭や各主任クラスも校長の学校経営方針を理解している」「学校組織全体に意思疎通が図られている」と認知することが重要であることを明らかにしている。

5. おわりに

社会領域の1年間の論文を展望してみて、まずその数の多さに驚かされた。特に紀要論文が予想以上に多く、内容的にはストレスとソーシャル・スキルについての研究が多かった。研究の深まりも見られ、コーピングの柔軟性やソーシャル・スキル訓練の持続性、社会的比較の分析的研究、学校経営などの研究が印象に残った。

教育現場を対象にした臨床的研究も豊富に見られた。心理教育や構成的グループ・エンカウンターの効果研究、学級崩壊から回復する事例研究などはそれだけで価値があると思われるが、今後は更なる分析的研究と一般的要因を抽出する研究への努力が期待される。その点で「問題の外在化」研究は原因帰属の考え方と臨床心理学の接点に位置し、実践的にも価値あるものと思われる。今後もどんどん「社会」領域の研究が理論的にしっかりした枠組を持ち、しかも理論だけにとどまらず、実践的になっていき、学校現場での期待に応えられるようになっていくことを期待したい。

最後に気になった点が見られた。それはいくつかの研究で得られた結果が常識的過ぎる印象をもった。単に関係を見出すだけに終わらず、その過程を明らかにしたり、その機序を分析していく研究が必要であろう。また分析法としてはパス解析が多用されているが、強いパスが見出されたなら、次の段階として、実験なりの方法で因果関係を実証する研究に進んでいくことが期待される。

引用文献

- 安立奈歩 2001 攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 475-487.
明田芳久・一前春子・三木哲也・大谷保和 2001 児童の仲間関係における意図帰属と対人行動—Dodgeの

- 社会的情報処理モデルによる検討— 上智大学心理学年報, **25**, 11-26.
- 雨宮基博・井上直子・小谷英文 2001 学級集団への集団精神療法の適用 国際基督教大学学報 I-A (教育研究), **43**, 133-145.
- 網谷綾香 2000 日本における教師のメンタルストレスに関する研究 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 221-226.
- 青山香奈子・濱口佳和 2001 ストレス対処方略の相補的影響—学級適応度・ストレス反応への影響の比較— 千葉大学教育学部研究紀要 (I: 教育科学編), **49**, 19-28.
- 浅川潔司・東 由佳・古川雅文 2001 青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, **21**, 99-103.
- 出口拓彦 2001 グループ学習に対する教師の指導と児童による認知との関連 教育心理学研究, **49**, 219-229.
- 出口拓彦・中谷基之 2000 グループ学習中の相互作用に及ぼす教師の介在および児童の社会的責任目標の影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 69-88.
- 榎本淳子 2001 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関係 教育心理学研究, **48**, 444-453.
- 淵上克義 2001 学校組織における影響力構造認知に関する実証的研究(III)—影響力の布置, 影響力の浸透度と学校目標認知との関連— 岡山大学教育学部研究集録, **116**, 11-23.
- 深田博己・木村堅一・牧野幸志・樋口匡貴・原田耕太郎・山浦一保 2000a わが国における説得研究の展望(1) 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 145-154.
- 深田博己・木村堅一・牧野幸志・樋口匡貴・原田耕太郎・山浦一保 2000b わが国における説得研究の展望(2) 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 155-164.
- 後藤靖宏・田中 妙 2001 女性教師のストレスの特徴 大分大学教育福祉学部研究紀要, **23**, 127-135.
- 濱田進一・坂西友秀 2000 教師と生徒の心理・行動に及ぼす組織特性の影響に関する検討(I)—中学校における学校組織の特性が教師の学校諸活動及び生徒の学級認知に及ぼす影響— 埼玉大学紀要 (教育学部・教育科学), **49**, 105-122.
- 橋本 剛 2000 肯定的/否定的対人関係のストレス媒介効果 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 89-101.
- 秦 政春 2001 小学生の「荒れ」に関する調査研究 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **27**, 157-188.
- 畠山 寛 2000 青年期の友人とのつきあい方に関する研究 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 417-424.
- 畠山美穂 2000 幼児の攻撃行動のタイプに関する研究—自然観察法から— 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 279-285.
- 平井美佳 2000 問題解決場面における自己と他者の調整 教育心理学研究, **48**, 462-472.
- 磯崎三喜年 2001 児童の学業成績における自己評価維持と学級適応に関する研究 国際基督教大学学報 I-A (教育研究), **43**, 67-77.
- 磯崎玲子・長谷川順一 2000 小グループ学習が中学2年生の数学に対する態度に与える影響 香川大学教育実践総合研究, **1**, 67-77.
- 上園恒太郎・西田利紀・内野成美 2001 グループ・エンカウンターとつなげた道徳授業 長崎大学教育学部紀要 (教育科学), **60**, 9-20.
- 金木智子・塚野州一 2001 不登校児における自己の価値づけの検討 富山大学教育学部研究論集, **4**, 1-5.
- 加藤 司 2001 コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究, **72**, 57-63.
- Kilburg, D. F. III, & 西川和夫 2001 日本の児童のストレスとストレス対処行動 三重大学教育学部研究紀要 (教育科学), **52**, 227-242.
- 木野和代・鈴木有美・速水敏彦 2000 友人の不快感情調整に関わる要因の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 59-68.
- 萱原道春・福永くるみ 2001 個が育ち集団が育つ学級経営—いじめ, 不登校問題をとおして学級全体が成長した1年間の記録— 金沢大学教育学部教育工学研究・実践研究, **26**, 1-12.
- 小高 恵 2000 親—青年関係尺度の作成の試み 南大阪大学紀要, **3**, 87-96.
- 小嶋佳子 2000 幼児による他者のネガティブ情緒の推測とネガティブ情緒への対処に関する文献的検討 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 241-248.
- 小嶋佳子 2001 対人場面におかれた他者の嫌悪を推測する5, 6歳児の能力 心理学研究, **72**, 51-56.
- 久米禎子 2001 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係 京都大学大学院教育学研究科紀要, **47**, 488-499.
- 久木山健一 2000 大学生の仲間入り場面における社会的情報処理 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 223-234.
- 黒田祐二・桜井茂男 2001 中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係 教育心理学研究, **49**, 129-136.
- 黒沢幸子・森 俊夫 2001 家庭内暴力を伴った不登校

- 女兒への「問題の外在化」アプローチの適用—「問題の外在化」による自我統合プロセス、およびスクールカウンセリングにおける「問題の外在化」の効用に関する考察— 臨床心理学, **1**, 217-229.
- 葛上秀文 2001 いじめの実態に関する実証的研究 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), **16**, 35-43.
- 前田和美 2000 荒れた学級にどう向き合ったか 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **4**, 35-48.
- 前田健一・安藤優美子 2000 子どもの仲間関係における人気度, 友人関係および孤独感 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 165-171.
- 牧野幸志 2000a 心理的リアクタンスに及ぼすユーモアの効果 高松大学紀要, **34**, 43-52.
- 牧野幸志 2000b 心理的リアクタンスに及ぼすユーモアの効果 高松大学紀要, **34**, 53-68.
- 丸山俊弥・今川民雄 2001 対人関係の悩みにについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響 対人社会心理学研究, **1**, 107-118.
- 南 俊也・今田里佳 2000 小学生の自己認知と級友認知の関連について—社会的比較及びポジティブ・イリュージョンの観点から 信州大学教育学部紀要, **100**, 197-208.
- 宮下一博 2001 非行少年の疎外感の受容に関する研究 千葉大学教育学部研究紀要 (I:教育科学編), **49**, 11-17.
- 長瀬幸恵・角間陽子・草野篤子 2000 子どもの問題行動における親子関係の影響—家族に対する社会的支援システムの構築を目指して— 信州大学教育学部紀要, **101**, 79-89.
- 中山正弘・古橋啓介 2000 不登校状態の中学生の自己受容について 福岡県立大学紀要, **9**, 95-107.
- 西出隆紀・中村沙也香 2001 虐待的なしつけが子どもの対人関係に与える影響について 愛知淑徳大学論集 (コミュニケーション学部編), **1**, 45-61.
- 西口利文 2000 学校現場における教師の心理的要因と児童への言葉かけとの関連 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 117-138.
- 西村 馨・小谷英文・井上直子・西川昌弘・石黒裕美子・中川剛太・能 幸夫 2000 教師の対人ストレス対処方略に関する臨床心理学的研究(4)—児童・生徒との関係におけるストレスと対処方略の類型化の試み— 国際基督教大学学報 I-A (教育研究), **43**, 54-69.
- 西村太志・浦 光博・長谷川孝治 2000 出来事の特徴の差異が自己評価過程における他者選択に及ぼす影響: 自己査定動機と自己高揚動機との観点から 社会心理学研究, **16**, 39-49.
- 大芦 治 2001 親子関係を測定する質問紙を用いた研究の文献目録 千葉大学教育学部研究紀要 (I:教育科学編), **49**, 1-10.
- 岡安孝弘・高山 巖 2000 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理ストレス 教育心理学研究, **48**, 410-421.
- 大石千歳・吉田富士雄 2001 内外集団の比較の文脈が黒い羊効果に及ぼす影響—社会的アイデンティティ理論の観点から— 心理学研究, **71**, 445-453.
- 大石史博・宇 恵弘 2000 青年期における愛着の基礎的研究(1)—成人用愛着尺度作成の試み— 関西福祉科学大学紀要, **4**, 79-86.
- 大野俊和・長谷川由希子 2000 「いじめ」の被害者に対する外見のステレオタイプ 実験社会心理学研究, **40**, 87-94.
- 大田伸幸 2000 ライバル関係の認知の基準 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 197-204.
- 折谷妙子 2000 対人関係における防衛性を規定する要因について 学習院大学人文科学論集, **9**, 165-187.
- 才田幸夫・春口徳雄 2000 ロール・レタリング (役割交換書簡法) による生と死の教育—中学校における実践報告— 犯罪と非行, **125**, 231-258.
- 坂本美紀・内藤満江 2001 小学生が持つ担任教師への信頼感に関連する要因—指導行動, 自己開示, スクール・モラールとの関係— 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **50**, 143-151.
- 坂中正義・田中巳貴 2001 小学生における構成型グループ・エンカウンターの効果に関する再検討—心理的成長の視点から— 福岡教育大学紀要, **50**, 191-198.
- 櫻庭隆浩・松井 豊・福富 護・成田健一・上瀬由美子・宇井美代子・菊島充子 2001 女子高校生における『援助交際』の背景要因 教育心理学研究, **49**, 167-174.
- 佐々木裕子 2000 幼児の返報行動における社会的情報処理 広島大学教育学部紀要 (第三部), **49**, 347-355.
- 杉浦 健 2001 2つの親和動機と対人的疎外感との関係 教育心理学研究, **48**, 352-360.
- 首藤敏元 2000 家族の共感経験と家族の成長に関する研究 埼玉大学紀要 (教育学部・教育科学), **49**, 63-76.
- 田中祐子・中澤 潤・中澤小百合 2000 単身赴任の長期化が母親のストレスに与える影響 心理学研究, **71**, 370-378.
- 高木邦子 2000 対人的動機と社会的相互作用経験が否定的対人感情の修正に及ぼす影響 名古屋大学大学院

- 教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），47，205-213.
- 戸田有一 2001 学校におけるピア・サポート実践の展開と課題—紙上相談とオンライン・ピア・サポート・ネット— 鳥取大学教育地域学部紀要，2，59-75.
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究，48，454-461.
- 内田利広・大内啓三 2000 不登校生徒に対する友達の援助の有効性—女子中学生の「つながり」をめぐって— 京都教育大学教育実践研究年報，16，229-241.
- 浦野裕司 2001 学級の荒れへの支援の在り方に関する事例研究—TTによる指導体制とコンサルテーションによる教師と子どものこじれた関係の改善— 教育心理学研究，49，112-122.
- 山川久恵・宮本正一 2001 不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす効果 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，1，65-72.
- 山本都久・瀬戸広美 2000 学級での居心地の良さを規定する要因 富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，1，51-55.
- 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 2001 小学生用攻撃性質問紙（HAQ-C）の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編），16，1-9.
- 山崎瑞紀・倉元直樹・中村俊哉・横山 剛 2000 アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究，48，305-314.
- 八並光俊・細見博文 2001 スチューデントサポートチームによる生徒援助システムの有効性に関する研究 兵庫教育大学研究紀要，21，37-48.
- 八並光俊・木村 慶 2000 組織開発による協働的生徒指導体制の構築に関する研究 学校教育学研究（兵庫教育大学教育研究センター紀要），12，65-75.
- 吉田俊和・小川一美・出口拓彦他 2000 「社会志向性」と「社会コンピテンス」を教育する 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），47，301-315.
- 吉村 斉 2000 幼児における他者行動の原因帰属と葛藤解決の関係 高知学園短期大学紀要，31，39-47.